

# 仕事って楽しい、人生っておもしろい 生徒にそう思ってもらって 地域の大人たちとの交流を進めている



## CASE 7

### 地域連携で 新しい風を 吹き込む先生

まつしま・わたる／情報デザイン科長。進路指導部。教科は商業。教員15年め。教員志望だったが大学時代にかかわった映画関係の仕事がおもしろく、そこに就職。その後、教育系出版社に入るも思い直し29歳で教員に。萩商工は8年め。萩は生徒の減少が著しい。萩の小中高全体で、良い教育を実現するのが今の願い。

## ICTスキルと広範な人脈を駆使して 生徒に「生きる力」を身につけさせる

松嶋 渉先生

萩商工高校(山口・県立)



↓「総合実践」では基本的に生徒が率先して制作を進めていく。つまづいたときに、先生が指導をするというスタイルだ。



↑「総合実践」の授業で生徒にアドバイスをしてくれる「萩LOVE」の面々。萩を愛する、各分野で第一線の専門家たちだ。

## アクティブラーニングで 「協力」を学ばせたい

2011年度の就職採用試験のこと。絶対に合格すると見られていた生徒が2人、落ちた。事前に面接練習はしていた。しかし、それだけでよかったか？ 1、2年次からできることはなかったか？ 松嶋渉先生は大きな責任を感じたという。

翌年から授業を変えた。1年必修の「ビジネス基礎」でディスカッションやプレゼンテーションを多く取り入れた。生徒のアウトプットの時間を増やすならば、インプットの時間は減らす必要がある。そのために「予習は当然」という文化に変えた。予習したくなる動画教材も作った。いわゆる「反転授業」の実践だ。そうした取り組みが「アクティブラーニング」と呼ばれることを後で知った。もともとアクティブラーニングありきではなく、反転授業ありきでもない。生徒に「生きる力」をつけたい一心だった。

結果、3年間多様なアクティブラーニングに取り組んだその学年は、採用面接で落ちる生徒がほぼいなかった。しかし、真のねらいは、そこにあったのではないという。「今の子どもたちは、とかく『競争』を煽られがちですが、実社会で求められるのは『協力』。教え合ったり、考えを伝え合うことを授業で行うのは、そのためです」

## 地域連携で 教師の人生も変わる

授業に地域の力を借りようと思いついたのは2010年。情報デザイン科3年「総合実践」をプロジェクト型授業にするべく萩市国体推進室に相談に行くと、国体関連のホームページを生徒に作らせてもらえることになった。

同年12月には、今度は地域活性化団体「萩LOVE」が高校を訪れ、地域サイトを一緒に作るうと提案。それが今につながる「萩LOVEハイスクール」プロジェクトの始まりだ。

いつかキラキラしたいけど  
どうすればいいかわからない。  
そんな高校生の心にうまく  
火をつける教師になりたい



↑「子どもの発達と保育」の授業で保育園の園児を招待。生徒自作の絵合わせブロックや輪投げ、ボウリングなどでお遊びをした。

**現実を知ってから  
進路を選んでほしい**

大谷先生は会社員時代、ふと勉強をしたくなったという。選んだのは、大学で学んだ家庭科。通信制大学で学び始めたら、すぐくおもしろかった。どうせやるなら教員免許を取ろうと頑張っていると、あれよあれよと教員採用試験に合格。当時38歳。迷った。給料は下がるけど、やりたいことがある。キャリア教育。もし子どもたちにそれができるのなら

ば——思い切って教員の世界に飛び込んだ。

家庭科で扱うテーマは、衣食住はもちろん、保育、生活設計、消費経済など実に幅広い。さっそく、自分のキャリア教育を始めた。

加工食品を教える授業で、栄養成分の説明だけではもったいない。ペットボトルの中身って実は原価はいくらか？ どうしてそれで売れるのか？ 世の中がどんなしくみで動いているのかを伝えた。

校外へもどんどん連れ出す。保育

<http://www.hagi-love.com/index.html>



↑地域密着コミュニティサイト「萩LOVE」の中の「萩LOVEハイスクール」というコーナー。生徒のスキルは年々上がり、今年、全国高等学校デザイン選手権大会の決勝大会に山口県から初出場を果たした。

コミュニティサイト「萩LOVE」の中に、萩商工の生徒が作る観光スポットなどのコンテンツをアップしていく企画。制作するなかで生徒が得ることは多い。Webの専門家から直接アドバイスをもらえたり、プレゼンでプロからダメ出しを食らったり、取材で緊張の体験ができた。

知り合いが知り合いを呼び、地域の大人たちが入れ代わり授業に訪れるようになった。そこで「仕事」や「人生」を話してもらうのも恒例だ。この学び全体が、生徒にとっては真正銘の「キャリア教育」である。さらにそれは、先生の「キャリア」にも

影響を与えている。

松嶋先生は今、彼自身が「萩LOVE」という団体に所属し、町おこしに積極的にかかわっている。団体を代表して、月1回、地元FMでアピールもしている。最近、地元中学校のICTに関するアドバイザーにもなった。ここまで深く萩に入り込むとは、予想もしていなかった。

「結局のところ、私自身がおもしろい人たちと共に豊かな人生を歩んでいきたいのです。地域連携のなかで、改めてそれに気づきました。生徒たちにも、仕事っておもしろい、人生って捨てたもんじゃないと思ってもらいたい。それを授業で伝えていきたいんです」

**PLUS ONE**

**ICT教育の「専門家」として  
そのすばらしさを伝えている**

初任校で尊敬する先輩教師に、いきなり「サーバーを作ってみて！」と命令されたのがICTに精通するきっかけ。そこでの2年間で大きく成長し、その後はどの高校に行っても、「コンピュータの専門家」として扱われるように。萩商工でも情報デザイン科の立ち上げ時、カリキュラム作りに大きくかかわる。現在は、県内の商業科教員の勉強会のコーディネーターなどを努め、ICTや反転授業を普及する立場。食わず嫌いの先生が多いと感じている。「地域学習もICTも同じですが、一度体験すると、その良さがわかるんですけどね」



ICTの生徒の飲み込みは早い。生徒には、社会に出て力をつけることがとても重要と伝えている。

→2015年8月に第6回を迎えた「県川レストラン」。年2回、教員や保護者を招待するかたちで開店。コンセプトは「高校生らしい雰囲気づくり、高校生らしくない料理を全力で」。



←これまでに和食、洋食、韓国料理などにチャレンジしてきて、第6回め、今夏のメニューは、写真のイタリアン料理だった。



→料金は500円の原価に「気持ち」を上乗せしてもらった。生徒は「接客が悪い」と実入りが少ないことを身をもって学ぶという。



PLUS ONE

料理の力で  
異文化理解を進めたい

大谷先生がこれから積極的に進めていきたい教育のひとつが、異文化理解教育。「食べること」に言葉はいらない。だから、日本人と外国人との交流に家庭科は貢献できると考えている。先生自身、教師海外研修でタンザニアに10日間訪れたり、ボランティアでカンボジアやベトナムを訪れている。今年4月には、クッキング部とベトナム人ボランティア団体が連携してベトナム料理教室が開かれ、食を通して交流を深めた。いつか生徒をベトナムに連れて行きたいと考えている。



ベトナムの米麺文化を扱った異文化理解授業。大谷先生はアオザイ姿で雰囲気を出そうとしたが、「先生、どうしたの？」という生徒も。

「将来の夢を語る生徒は心配ないのですが、問題は、自分から声をあげない生徒が多いこと。認められたい、キラキラしたいけど、自分の力をどう発揮すればいいかわからない。私は、そんな生徒の心に火をつける係だと思っています」

CASE 8

教科で  
キャリア教育を  
実践する先生

おおたに・あやみ / 学校経営推進グループ。教科は家庭。教員4年め。大学卒業後、教育系企業2社で計16年間のサラリーマン生活を送る。2社めに勤めながら大学で学び直し、教員免許を取得して教員の道へ。「生徒に偉そうに言っても、授業はまだまだ薄っぺらなんです」。現在、通信制大学院で食文化を学んでいる。

高校生レストランや国際理解教育を通じて  
生徒を現実社会や異文化につなげる

大谷彩美先生

川崎高校(神奈川県)



士になりたい生徒たちを連れて保育園に行く。緑豊かで環境万全の園と、マンション一室のこぢんまりとした園の両方。保育士の現実を知ってもらいたいからである。「子どもがかわいから」だけで保育士になる生徒が多いが、それでは危ういと大谷先生は考える。

パン職人にあこがれる生徒たちとパン店に見学に行ったりもする。「実はフランスよりも、日本のパンのほうがいいといわれています」といった話をプロから直接聞くと、学校では見たことがないくらい生徒たちの目は爛々と輝く。

パン店で盛り上がった後、数人の生徒に「高校でレストランを出店してみない？」と誘ってみた。「やるやる！」という反応。「やるなら『プロ』としてやろう。何がプロなのか、みんな

夏休みの宿題から  
願望や素質を見いだす

大谷先生は、数々の新しい取り組みをしてきた。地味だけれど自分のなかで一番のヒットだと思っているのが、「ホームプロジェクト」。簡単に言えば、夏休みの宿題プロジェクトだ。料理のレシピや、ファッションデザイン、絵本など家庭科は巷のコンクールが数多い。生徒の視野に入っていないかったそれらの情報を整理して小冊子で配る。「全員参加」がルール。すると、授業で一言も発しないような生徒が、とてもユニークな作品を仕上げてきたりする。それがねらいだ。

「将来の夢を語る生徒は心配ないのですが、問題は、自分から声をあげない生徒が多いこと。認められたい、キラキラしたいけど、自分の力をどう発揮すればいいかわからない。私は、そんな生徒の心に火をつける係だと思っています」